



## 2017年2月 第15巻第2号

### かく語りき—聖人の言葉

「気を付けなさい、母親の世話をするのを口実に、世俗に巻き込まれてはいけません。」

(ホーリー・マザー シュリー・サーラダー・デーヴィー)

「私への奉仕として為した仕事は、神聖で浄らかなものになる」

(シュリー・クリシュナ)

### 今月の目次

- ・かく語りき—聖人の言葉
- ・2017年4月の予定
- ・2017年1月の逗子例会  
ホーリー・マザー シュリー・サーラダー・デーヴィー生誕165周年祝賀会
- ・1月の逗子例会 午後のプログラム  
「ホーリー・マザー 崇高なる理想の手本」  
スワミー・メーダサーナンダによる講話
- ・2017年元旦のカルパタル

- ・2016年クリスマス・イブ礼拝  
「イエスが奇跡を行った理由と十字架にかけられた意味」

レオナルド・アルヴァレスさんの講話

- ・忘れられない物語
- ・今月の思想

### 今月の予定

- ・生誕日

ラーマナヴァミ 4月5日(水)

シュリー・シャンカラチャーリヤ

4月30日(日)

- ・2017年4月の協会の行事

4月1日(土) 10:00~12:00

東京・インド大使館例会

講義：『バガヴァッド・ギーター』（無料）

場所：インド大使館

お申込み・お問合せ：

<http://www.gita-embassy.com/>お問合せ/

※入館・受講するには、大使館発行の

ID カードが必要です。詳細は協会のウェブサイト「インド大使館 ID」(ホームページ左側のメニューにあります)をご覧ください。

※免許証など写真つきの身分証を必ずお持ちください。

4月2日(日)、9日(日)、16日(日)、23日(日)、30日(日) 14:00~15:30

ハタ・ヨーガ・クラス

場所：逗子本部別館

お問い合わせ：080-6702-2308(羽成淳)

※体験レッスンもできます。

※専用ホームページをご覧ください：

<http://zushi-hatayoga.jimdo.com/>

4月4日(火) 14:00~16:30

火曜勉強会(毎月第2火曜に開催予定)

場所：逗子本部本館

お問い合わせ & お申込み：

[benkyo.nvk@gmail.com](mailto:benkyo.nvk@gmail.com)

4月8日~10日

サットサンガ in 大分

お問い合わせ：0972-62-2338 じねん

4月15日(土) 10:00~12:00

『ウパニシャド』スタディークラス

講義：ウパニシャド(無料)

場所：インド大使館 03-3262-2391

お申込み・お問合せ：

<http://www.gita-embassy.com/>お問合せ/

※入館・受講するには、大使館発行の

ID カードが必要です。詳細は協会のウェブサイト「インド大使館 ID」(ホームページ左側のメニューにあります)をご覧ください。

※免許証など写真つきの身分証を必ずお持ちください。

4月16日(日) 10:30~16:30

逗子例会

場所：逗子本部本館

10:30 瞑想

11:00 講話：スワーミー・メーダサーナナンダ

12:30 昼食

15:30 特別講話：シュリマティ・ショーバナ・ラーダクリシュナ女史(インドより)

テーマ：「マハトマ・ガンジー」

※当日のライブストリーミングの開始時刻は、午前は10:50、午後には15:20の予定です。

4月28日(金)

ホームレス・ナーラーヤナへの奉仕活動

現地でのお食事配布など。

お問い合わせ：佐藤 090-6544-9304

4月29日(土・祝) 5:00~20:00

アカンダ・ジャパム

場所：逗子本部本館シュライン

朝5時から夜8時までの間、瞑想とジャパ(神様の名前を心の中で唱え続けること)を切れ目なしに行う瞑想会で

す。宿泊や食事を提供します。

お問合せ：鈴木

(vedanta.karmayoga@gmail.com)

4月20日までにご希望の時間帯(1時間単位で何時間でも)をご連絡下さい。

### <2017年夏季リトリートのお知らせ>

7月15日(土)～17日(月・祝)

・宿泊場所：奥琵琶湖マキノグランドパークホテル

<http://www.gphotels.jp/>

・主な内容：比叡山延暦寺巡礼、琵琶湖半での瞑想とヨガ、講話

今年は目の前に美しい砂浜が広がる静かなホテルに泊まり、早朝はプライベートビーチで瞑想やヨガを行う予定です。

インド哲学をベースにした、わかりやすく実践的なマハーラージの講話もご期待ください。

また比叡山では、今もなお最澄の祈りが感じられる神聖な場所など巡礼をいたします。

詳細は4月上旬にHP上で発表予定です。

### 2017年1月の逗子例会

#### ホーリー・マザー シュリー・サーラダー・デーヴィー生誕165周年祝賀会

1月15日(日)、日本ヴェーダーンタ協会は1月の逗子例会でホーリー・マザー シュリー・サーラダー・デーヴィー生誕165周年祝賀会を行いました。

午前6時、逗子協会本館のシュラインでマンガラ・アーラティ(朝拝)が始まり、近くに住む方や、祝賀会の準備のために前日や数日前から協会やホーリー・マザー・ハウス(女性用宿泊施設)に宿泊されたボランティアの信者さんらが出席しました。

朝食が済むと、祝賀会会場の逗子協会別館の1階では祭壇やプージャ(儀式)用の台、プージャの道具などが準備され、参加者用の椅子数十席とAV機器が設置されました。また、本館では供物のフルーツのカットや盛り付けが行われました。

別館の祭壇では、スワミー・メーダサーナンダジー(マハーラージ)が、ホーリー・マザー、シュリー・ラーマクリシュナ、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの写真の周りに置いた花の位置などを調整して飾り付けを完成させました。そして、写真の額にサンダルウッド(白檀)の練り粉をつけた後、五体投地で拝礼しました。

プージャの道具やAV機器の準備が整うと、マハーラージが合図を送り、ソフィヤさんがホラ貝を3度吹いてプージャの開始を告げました。ギーの油の入ったランプに火が灯され、香が焚かれ、マハーラージはプージャ用の台の上でマントラを唱えながら儀式を執り行いました。約50分後、儀式が終わり

ベルとホラ貝が鳴り響きました。マハーラージは台を降りると、祭壇の前で再び頂礼しました。



続いてマハーラージは、五大要素を象徴する道具を使ってアーラティを行いました。シャンティ泉田さんの演奏するキーボードの伴奏と、ベル、ホラ貝、シンバルの音に合わせて、全員で賛歌「カーンダナ・バーヴァ・バーンダナ (Khandana Bhava-Bandhana)」を歌いました。マハーラージは再び祭壇に向かって頂礼し、その後、一同で「サルヴァマンガラー・マンガーレ (Sarvamangala Mangalye)」を斉唱しました。



次に、全員にプシュパンジャリ（花の奉獻）用の花と葉が配られ、マハーラージが参加者の間を歩いてガンジス川の水を少しずつ皆の上に振りかけました。そして、一同起立し、ホーリー・マザーに捧げるプシュパンジャリのマントラをマハーラージの先導で一斉に唱え、皆、ホーリー・マザーに花を捧げました。その後、マハーラージはプシュパンジャリのマントラの日本語訳を言い、参加者が復唱しました。プシュパンジャリが終わると祭壇の供物が本館の台所に運ばれ、本館で昼食のプラサードの準備が整えられました。

参加者は本館に移動して昼食のプラサードをいただき、午後2時30分頃から再び別館で午後のプログラムが行われました。『ホーリー・マザーの生涯』の輪読に続いて、マハーラージがホーリー・マザーをテーマに日本語でお話しし、マザーは、つき合いにくい親族の世話をするなど難しい人間関係の中で常に忙しく働いていながらも心は静けさに満ちていたことに触れました。（講話は本号に掲載されています。）



そして、シャンティさん作の日本語の賛歌を皆で歌い、聖句詠唱、瞑想を行いました。その後本館で茶菓が振る舞われました。当日の参加者は約45名でした。



## 1月の返子例会 午後のプログラム 「ホーリー・マザー 崇高なる理想の手本」 スワミー・メーダサーナンダによる講話

今日は、プージャやアーラティ、プシュパンジャリを行ってホーリー・マザー シュリー・サーラダー・デーヴィーの誕生日をお祝いしています。さて、偉大な悟りの魂を偲んでこのような祝賀会を行うのはなぜでしょうか。もちろん、こうした優れた人物を心に留めておきたいからですが、その生涯からインスピレーションを得て、私たちが少しでも成長し、前進し、自分をより完成させるためでもあるのです。

今、『ホーリー・マザーの生涯』を輪読しました。また、皆さんは、私がマ

ザーについて行う講話を何年も聞いていますね。そこで聞きたいのですが、マザーの性格で一番印象に残っているのはどのようなところでしょうか。マザーのお写真を見て、最初にどのような印象を受けますか。



(信者1) 私が一番好きなのは、マザーの慈悲心です。20年前に最初に協会に来た時、「私の息子が泥にまみれていれば、泥を払って膝に抱き上げてやるのは私です」という言葉を聞きました。それまで、罪人は悪い人間だと思っていましたが、どのような過去を背負っていてもマザーの慈悲深い愛を受けることが出来るのだと知りました。お母さんの愛で人は変わる。このような愛というものにとっても惹かれました。

(マハーラージ) そうです、マザーは慈悲と愛情を惜しむことはしません。罪人であるかどうかなど考えないのです。これは印象深いですね。

(信者2) 私は結婚しているので、タクル (シュリー・ラーマクリシュナ) とマー (ホーリー・マザー) の結婚が

普通の人との結婚とは違うと聞いて謙虚な気持ちになりました。

(マハーラージ) その結婚についてどのような印象を受けましたか。

(信者 2) 聖者同士の結婚ですから、特別な意味のあるものだと思います。また、マザーは母なる神の化身であったのに、献身的な妻のようにタクールのお世話をしました。さらに、タクールは自分の偉大さを隠すということはしませんでした。マザーは普通の人には分からないように、隠していました。こういうところに感動しました。

(信者 3) マザーは私のお母さんですから、何も心配していません。

(マハーラージ) 自分を産んだお母さんとマザーはどこが違いますか。

(信者 3) マザーは、魂のお母さんです。私を産んでくれたお母さんとの関係は肉体上のものです。魂のお母さんであるマザーとの関係は、絶対に切れないという安心感があります。膝に乗ったら頭を撫でてくれそうな優しさを感じます。

(信者 4) マザーはラーマクリシュナのシャクティ（聖なる母の創造エネルギー）として現れた方だと思っているので、基本的に、人間、普通の人とは

見ていません。ベルル・マトのホーリー・マザー・テンプルで瞑想していた時、引き込まれるような大きな愛を感じました。女性が本質的に持っている愛、その究極のものを表している方だと思います。

(マハーラージ) 例えば、マザーの愛の他に、普通のお母さんの愛、お父さんの愛、友達の愛、夫の愛、妻の愛などがあります。マザーの愛が違うというのはどういうところでしょうか。

(信者 4) 全然違います。マザーの愛は普遍的で、ある一定の人にだけではなく誰にでも公平に与えられる愛です。

(信者 5) マザーが私たちにいろいろ教えてくださっている全部が好きですが、自分への戒めと思っている言葉は、「平和を望むなら、他人の欠点を見つけないで自分の欠点を見つめなさい」です。これは何度自分に言い聞かせても実践が難しいですが、自分を戒めるために何度でも繰り返そうと思っています。

(信者 6) マザーが誰に対しても「わが子よ」と呼びかけてくださるので、つつまれるような安心感があります。

(マハーラージ) ホーリー・マザーの写真を見た時にたいていの人を受ける印象は、穏やかさ、静けさです。青空

のようです。青空を見上げると、穏やかさ、静けさを感じますね。『バガヴァット・ギーター』のなかに興味深い一節があります。（第4章18節）

Karmani akarma yah pasyed akarmani  
ca karma yah

Sa buddhiman manusyesu sa yukta  
krtana-karma-krt

（日本語訳）活動の中に無活動を見、無活動の中に活動を見る人は賢者であり、そうした人は、たとえどんな種類の仕事をしていようと、相対世界を超越した覚者（ヨーギ）である。

### 休むことなく働き、奉仕する

この一節を最もよく体現した方がマザーです。毎日、朝から晩まで、生まれてから死ぬまで、マザーにはやるべき仕事がたくさんありました。「休む」という言葉の意味を知らなかった程忙しかったのですが、マザーは常に穏やかで静かでした。これは、マザーの性格の素晴らしい点ではないでしょうか。もちろん、慈悲や謙虚さ、悟り、無限の愛などの体現者でもありましたが、マザーの写真を見た時の第一印象は、圧倒的な静けさと穏やかさでしょう。タクール（ラーマクリシュナ）は、いつも神について話し、指示を与えていました。しかし、ホーリー・マザーは、体、心、霊性のすべての面で休むこと

なく働き、信者らに対しても休むことなく話をしました。一瞬たりとも休みませんでしたでしたが、マザーには大いなる静けさと穏やかさがあります。

カルマ・ヨーガとは何でしょうか。私たちは働かねばならない、そして働きを礼拝とする、これがカルマ・ヨーガですね。そうすることで、働きからストレスを受けることなく平安と静けさを享受することができます。ホーリー・マザーの生涯は、まさにカルマ・ヨーガの実践の生きた手本です。

『ホーリー・マザーの生涯』を見ると、マザーは、厄介な人、付き合いにくい人、かつとなりやすく感情的な人、落ち着きのない人などに囲まれていました。私たちは、周りの人が静かだと自分も穏やかでいられますが、ホーリー・マザーの場合はそうではありませんでした。周囲に騒々しい人がいたのですが、マザーは常に穏やかさと心の平安を保っていました。それだけでなく、体と心と霊性の面で他の人のお世話をし続けたのです。今、イニシエーションを受けたかと思うと、次の瞬間には、イニシエーションを受けた人たちのために料理をしていました。

ある意味では、シュリー・ラーマクリシュナとスワーミー（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）は出家の人にとっての理想であり、家住者にと

っての理想の手本はホーリー・マザーだと言えるでしょう。生活において仕事は絶対に必要ですが、ストレスの原因にもなります。現代では、生活のテンポが速く競争も激しいので、ストレスは増大しています。かつては生活のペースがゆっくりでした。朝、電車に乗ろうとして走っている人をよく見かけますね。「駆け込み乗車はせずに次の電車をお待ちください」とホームに書いてありますし、実際、数分で次の電車が到着しますが、皆「これは私の電車だ」と言わんばかりに停車に駆け込みますね。

スワミー・サーラダーナンダジーがホーリー・マザーについて興味深いコメントをしています。「マザーの周囲は、様々な理由から常に騒々しい雰囲気であったが、マザーは忍耐強く穏やかで静かで、『活動の中の無活動』の最高の手本であった」

若い僧侶たちの中には、時折問題を起こす者や、仕事のやり方が他の者と合わない者もいました。サーラダーナンダジーは、そうした僧侶を自分の近くに置いて状況が改善するよう取り計らいました。サーラダーナンダジーは霊的レベルが非常に高かったのですが、自分を見習えとは言わず、常に「マザーを見なさい」と言って諭しました。狭く騒々しい環境の中でたくさんの仕事をしていたにもかかわらず、マザー

は忍耐強く穏やかで静かでした。まさに「無活動の中に活動を見、活動の中に無活動を見る」の素晴らしい手本でした。

## エゴを抑える

私たちはエゴ（自我）が強いと穏やかさや平安を得ることはできません。強いエゴは怒りや嫉妬などの否定的な感情の原因となり、良い人間関係や職場の雰囲気損ねます。エゴを抑えるには二通りの方法があります。一つは「私は神様の道具である」と考えることです。だれもが神様なのですから、神様の道具として神様のお世話をするので、困難は神様からやってきますが、才能や力も神様から授けられると考えてください。心底このように考えることで、うぬぼれの気持ちは小さくなりやがて消えます。マザーの生涯ではこの考え方が実践されていますね。

先ほど、ホーリー・マザーの愛は無限だが普通の人々の愛は限定的だという話がありました。普通の人々は「夫や妻、家族などを愛しているけれども、他の人まではとても愛せない」と考えています。愛を上限まで使い果たしているため、ほかの人を愛したら家族への愛が減ってしまうかのようです。これは、私たちの愛は執着に近いので、愛の対象が限定的で愛の量にも上限があるからです。しかし、純粋な愛には境界が



ありません。純粹な愛の源は神であり無限ですから、その対象もその量も無限です。

## 神様の道具になる

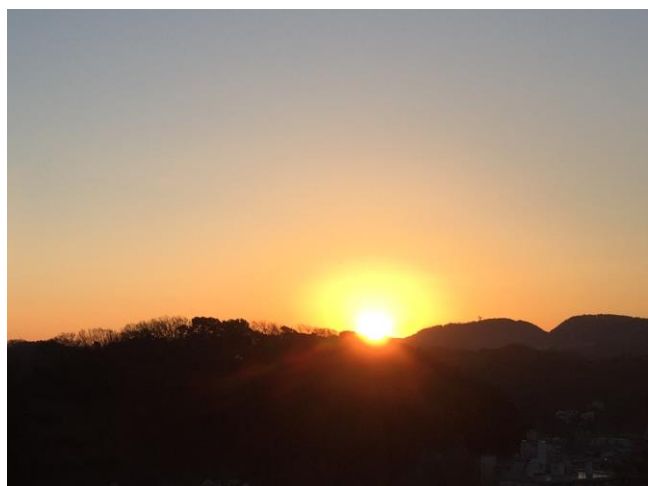
『バガヴァッド・ギーター』には、「すべての者の中に私を見、私の中にすべての者を見る者は、最も偉大な人である」と書いてあります。言い換えると、自身の中に神さまを見て、その同じ神様を他者の中に見るということです。そうすることでエゴは小さくなります。誰にでもエゴがありますがそれぞれエゴは異なります。このエゴは、自分を「肉体と心の複合体」だと考えていることから生じます。「私は神様の道具だ、神様のお世話をするのだ」と考えればエゴを小さくすることができます。これを実践するには、イシュタ（自分の選んだ神）がすべての人の中にいると考えてください。例えば、シュリー・ラーマクリシュナの信者なら、すべての人の中にラーマクリシュナがいて、そのラーマクリシュナをできる限りお世話する、と考えるのです。

エゴを抑えるもう一つの方法は少し難しいやり方で、ギャーナ・ヨーガに基づいて「私は純粹意識である」と考えます。私が肉体でも心でもないのであれば、この仕事をやっているのは誰なのか——こう考えることでエゴのない状態と同じ結果を得ることになりま

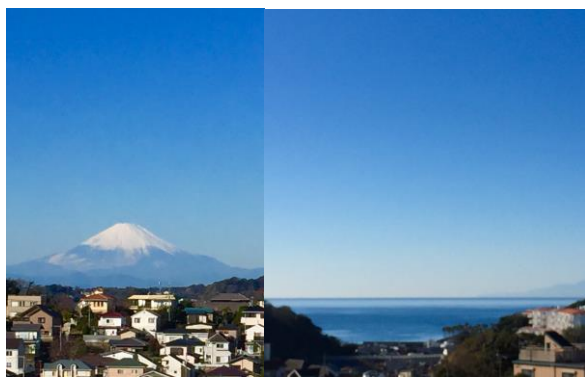
す。活動の中に無活動を見、無活動の中に活動を見る。しかし、この考え方は実践が少し難しいでしょう。大半の人には、「私は神様（＝純粹意識）である」と考えるよりも「私は神様の道具である」と考えた方が簡単です。ホーリー・マザーは生涯を通じて、神様の道具として休むことなく神様のお世話を続けたのです。

## 2017年 元旦のカルパタル シャンティ泉田さん寄稿

1月1日（日）、逗子協会本館にて毎年恒例の元旦のカルパタルが行われました。早朝、シュラインで瞑想した後、午前6時20分頃から、特別に本館2階のベランダでマハーラージの唱えるガーヤットリー・マントラを聞きながら神聖なバイブレーションに包まれて初日の出を拝ませていただきました。



朝食後は、マザーズハウス近くの山へ散歩に行きました。雲一つない空、雄大な富士山、真っ青な海。神様の愛を一杯に感じながら祈りました。



午前11時30分、聖典の輪読の後、レオナルド・アルヴァレスさんとロニー・ハーシュさんが賛美歌「アメージング・グレース」を歌われました。続いて、マハーラージが新年の挨拶を述べられ、「毎日が元旦だと思って、過去を後悔せず、未来を心配せず、今日だけに集中して、今日を良く過ごすこと」と話されました。



その後、マハーラージ自ら皆さんへお料理をサービングされ、和やかに昼食をいただきました。



カルパタルは、ヒンズー教、仏教、カトリック、神道と4つの宗教をお参りする日なので、午後2時、マハーラージと希望者で諸宗教の寺院・教会の参拝に向かいました。1月というのに上着が要らないくらい暖かく、真っ青な青空の下、徒歩で鎌倉へ。まず高徳院の大仏の前で「ブッダ・スートラ」を全員で朗唱し、祈りました。

次のカトリック雪ノ下教会では、チャペルで静かに祈りをささげた後、レオナルドさんと教会の女性のリードとともに讃美歌を歌いました。

最後に、鶴岡八幡宮に向かいましたが、境内に入る前に参拝者で大渋滞。大変騒がしい中、マハーラージは夜空に輝く美しい三日月を指して一言、

「外はどんなに騒がしくても、心の中



「はあの月のように静かでいましょう」と言われました。結局、人込みの中1時間以上も待つという苦しい時間でしたが、マハーラージが常に心静かに神様とつながっている様子を見て私達も習うことができました。

協会に戻ったのは夜7時半過ぎで、皆さん疲れた様子でしたが、私はとても幸せで満たされた気持ちでした。初めて協会のカルパタルに参加でき、新年をこのような神聖な場所で、グルとともに神聖な気持ちで迎えられたのです。たくさんの恩寵をいただき、シュリー・ラーマクリシュナに心から感謝いたしました。



2016年クリスマス・イブ礼拝

「イエスが奇跡を行った理由と十字架にかけられた意味」

レオナルド・アルヴァレスさんの講話

イエス・キリストは2016年前に現在のイスラエル生まれました。イエス様の母であるマリア様は、天使ガブリエルからお告げを受け、精霊の子を宿し神の子を産むだろうと言われました。

当時、イスラエルはローマ帝国の一部でした。ローマ帝国は全男子の人口を調べるよう定めており、イエスの父ヨセフはマリアと共にベツレヘムに向かっていました。ヨセフはダビデ王の家系だったのですが、ダビデ王はベツレヘムで生まれたのでヨセフもそこで登録をしなければなりませんでした。

しかし、途中でマリア様が破水し、出産しなければならなくなりました。近くにあった旅館は満員で泊まることができなかったので、仕方なく厩（うまや）に行き、そこでイエス様が生まれました。こんなにつつましい場所で神の子が生まれたのです。

イエス様を最初に見たのは羊飼たちでした。救い主がベツレヘムで生まれたと天使に言われ、見に来たのです。その後まもなく3人の占星術の学者たちが、イエス様の生まれた場所を示す不思議な星に導かれて、東の方（おそらく現在のインドかペルシャ）から拝みにやって来ました。学者たちは黄金、乳香、没薬を贈り物として捧げました。黄金は一般に王への捧げ物であり善と徳を象徴し、乳香は当時の近東で礼拝

の儀式によく使われていたもので神聖さの象徴、没薬は苦しみと死の象徴でした。これらはすべて、イエス様の地上での物語を象徴していました。

その頃のイスラエルはユダヤという名で、このユダヤを治めていたのはヘロデ王という人でした。ヘロデ王は暴君で、ユダヤ人の新しい王が誕生したという噂を聞くと嫉妬に駆られました。イエス様がどこにいるかわからなかったため、2歳以下の長子はすべて殺すようにと命じました。そうすれば自分以外の誰も王として支配することがないからです。

その晩、天使ガブリエルがヨセフの夢に現れて、ヘロデ王の生きている間はエジプトに逃げているようにと言いました。ヨセフはこれに従いイエス様は死を免れ、7~8歳になるまで家族と共にエジプトに暮らしました。やがてヘロデ王が死ぬと、ヨセフの夢に天使ガブリエルが再び現れ、イスラエルに戻るように言いました。このことから、イエス様が今で言う難民の生活を経験していたことが分かります。

幼いころのイエス様についてはほとんど知られていません。ヨセフが大工仕事をある程度教えていたことは分かっています。また聖書には、イエス様が12歳のころある事件が起きたことが書かれています。イエス様は両親と

もに過越祭（すぎこしさい）に参加するためにエルサレムに行きました。過越祭は、モーゼによって導かれたユダヤの民がエジプトから解放されたことを祝う祭りです。イスラエル各地からたくさんのユダヤ人が集まっていました。祭りが終わり、皆、帰り始め、ヨセフとマリア様も帰り始めました。二人はイエス様が一緒にいると思っていましたが、実はイエス様はエルサレムの寺院の中で教えを説いていました。2人は途中まで来たところでイエス様がないことに気づき、探しに戻りました。。丸2日間探した後、お寺で教えを説いているイエス様をやっと見つけました。マリア様はこう言いました。

「『なぜこんなことをしてくれたのです。ご覧なさい。お父さんもわたしも心配して探していたのです。』するとイエスは言われた。『どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。』」（ルカによる福音書2章49節。『和英対照聖書 新共同訳』日本聖書協会、2001年。以下同）

イエス様が13歳の時から30歳の時までのことはほとんど知られていません。ルカによる福音書に唯一こう書かれています。「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。」

(5章52節)

30歳の時、イエス様はガリラヤで宣教を始め、「神の国は近づいた」という知らせを伝えました。そして、罪から悔い改める必要があるが、神の慈しみも皆の上にある、とも言いました。さらに、様々な奇跡を起こし始めましたが、これが原因で後に十字架にかけられました。

今日お話ししたいのは、なぜイエス様は奇跡を起こしたのか、そして十字架にかけられたことの意味は何だったのかということです。

## イエスの降臨前の数百年間

まず当時の時代背景を理解するために、イエス様が生まれる6~7百年前までさかのぼる必要があります。イスラエルの領土と人々は初めにアッシリアに、次にバビロニアに併合されました。これらの帝国の人々は信仰心が篤かったのですが、宗教的慣習は墮落していました。例えば、神殿の中には娼婦や男娼がおり、また、人間を神々に生贄として捧げていました。

イスラエルの宗教は危機的な状況にありました。イスラエルの民は唯一神を信仰しており、この神は人間的で、善意と愛情がある一方、厳格で罰を与える神でした。他の近東の国々で崇められていたのは太陽の神、大地の神、火の神、水の神など物質や要素に限定



されていましたが、イスラエルのこの唯一神はそれらをすべて超えた、世俗を超越した存在で、近東には珍しい宗教でした。こうした物質や要素の神々を礼拝すると、世俗的な幸福をすぐに手に入れることができました。バビロニアもこのような宗教で、その国力や富と栄光も相まって、イスラエルの人々の多くはこの宗教に惹かれ改宗していきました。この様子は旧約聖書にも記述があります。それまでユダヤ人には宗教に根ざした伝統的慣習がありました。このことは、長い歴史の間に偉大な預言者や聖者が数多く生まれたことから分かります。また、カバラ（ユダヤ教の伝統に根ざした神秘主義思想）の学者であるアリエ・カプランによると、古代のユダヤ人は瞑想の習慣があったとも言われています。これらのユダヤ人は、肉体的、精神的純粋さを重んじていたことから厳しい道徳的な決まりがあったので、バビロニアなど周囲の国々の緩く楽な決まりに惹きつけられたのです。

## 信仰を保つ

ユダヤ人の信仰がどのようなものか大まかなイメージをつかむために、ユダヤ教で最も重要な祈りの言葉である「シェマー イスラエル（聞け、イスラエルよ）」についてお話ししたいと思います。この言葉に、ユダヤ教の内容とユダヤ人の信仰の強さが表れている

と言ってもいいでしょう。この言葉は、旧約聖書の申命記6章4節から9節に書かれており、数千年にわたりユダヤ人が唱えてきたものです。

聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。

あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。

今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、

子供たちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。

さらに、これをするしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい。

イスラエルの民のうち10支族がアッシリアに同化し、ユダヤ人のアイデンティティや慣習がまさに失われようとしていた中、ユダヤ人は伝統を守るためにどうしたのでしょうか。当時のユダヤ人の間には主に2つの社会階層がありました。1つは「レビ人（びと）」と呼ばれる祭司で、神への礼拝の儀式を司り、人々に宗教的、道徳的教えを授けて霊的な指導を行って、人々がこれまでの伝統を確実に守るようにしていました。もう1つの階層は様々な仕事を人々で、農業、商業、鍛冶、

大工など、先祖が行なってきた仕事の種類によって分けられており、これらがイスラエルの主な12の支族になっていました。レビ人は、ユダヤ人が信じ守るべき神や道徳的教えを詳細に書き記してまとめ、人々はこれを暗記して書かれている通りに行うようにとされてきました。こうすることで、ユダヤ人の信仰とバビロニアの信仰を明確に区別することができると考えていたからです。こうしてまとめられた「トーラー（律法）」には良い事が数を多く書かれており、「十戒」もその1つです。

わたしは主、あなたの神…あなたには、私をおいてほかに神があってはならない。

あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。

安息日を心に留め、これを聖別せよ。

あなたの父母を敬え。

殺してはならない。

姦淫してはならない。

盗んではならない。

隣人に関して偽証してはならない。

隣人の妻、…など隣人のものを一切欲してはならない。

(出エジプト記 20 章 2 節～17 節から抜粋)

## 祭司の階層の衰退

しかし、差別的な決まりも多くありました。霊的に純粋であることを大切にする一方、純粋さを熱望するがあまり肉体の純粋さを重視していました。食べる前に手を洗う、毎日入浴するなど、健康に良いことをするという慣習があっただけでなく、場合によっては人を社会から追放することもあったのです。例えば、重い皮膚病を患っている人は完全に治るまで自分の住む集落に入れてもらうことはできませんでした。当時、皮膚病の多くは治療法が分かっていたため、一旦病気になれば社会に戻ることはできませんでした。イスラエルでは、社会から追放されるということは死ぬよりも辛いことでした。皮膚病になって1週間から3週間経っても治らなければ、その者は社会から追放されました。服に鈴を結びつけ、ユダヤ人の集落を通り過ぎるときは常に大声で「『私は汚れた者です。汚れた者です』と呼ばわらねばならない。」(レビ記 13 章 45 節)とされてきました。出血を伴う病気にかかった女性も同じような運命を辿りました。

古代のユダヤ人はカルマによる因果応報のようなものを信じていました。神を信じ忠実で、十戒を守り、良い生き方をしていれば、病気や災難に見舞われることはないと考えていました。バビロンの捕囚など、自分たちに降りかかった運命は自分たちの犯した罪の報いであると考えていました。個人の

レベルでも、不治の病にかかる人は神に罰を与えられているのだと考えました。祭司らは民に対し、病気という肉体的な差別と、罪を犯したのだから病気になったのだという霊的な差別という二重の差別を行なったのです。このような「触れるべからず」という考え方が蔓延していました。

また、祭司の階層の人々は仕事をせず土地も所有しておらず、他の 12 支族の人々に養われていました。12 支族の人々は、祭司にお金や最高の食べ物を与えなければなりません。祭司の階層に必要とされていたのは純粹さを保つことだけでした。しかし、イエス様の生まれる頃までにこの祭司の階層はひどく墮落し、人々に重税を課しながら自分たちは働こうともしませんでした。民を裁いて抑圧していたのですが、信仰心の篤い民はこうした不公平な裁きを神の罰だと考えたのです。祭司はまた、自分たちが書いた律法を都合よく解釈しました。例えば、神殿に捧げられたものはすべて神のものであるから返すことはできないとされていたのですが、このことを利用して、ずる賢い祭司は自分の親を養うために送るはずのお金を祭壇に捧げ、これはもう神のものであるから他の事に使うことはできないと言い、自分のお金として使ったのです。

イエスは霊性の回復のためにやって来た

イエス様は最初、真の霊性や信仰とは何かを説きました。イエス様の弟子たちが食事の前に手を洗わないのを見た祭司らは、彼らが汚れていると言いました。しかしイエス様はこれに対して、杯の外側を清める者の内側は汚れていっばいであると言いました。最も大切なのは肉体の清らかさではなく内なる清らかさであるということです。

またイエス様は、皮膚病にかかった人々を数多く癒し、これらの人々は追放の身から解放され社会に戻ることができました。出血の止まらない病気にかかった女性、盲人、足の悪い人、精神的な病気の人など、悪魔に取り憑かれているとされていた人たちも癒し、皆、社会に戻ることができました。

イエス様は祭司が定めた厳格で無慈悲な律法の抑圧から人々を解放しましたが、権力を失っていった祭司らはイエス様に激怒しました。1 週間の 7 日目である安息日は神の礼拝を行う日なので仕事をするのは許されていませんでしたが、この安息日にイエス様が人々を治療したと言って非難しました。彼らにとっては、安息日に良いことをするのも許されるべきことではなかったのです。しかしイエス様は、飼っている羊が安息日に穴に落ちたら引き上

げてやるだろうと指摘し、彼らの偽善を暴いたのです。また、祭司には安息日に行う祭司の仕事がありました、これは安息日に働いてはならないと言う彼らの定めた決まりに矛盾します。ですから祭司には、イエス様が安息日に人々を癒したり命を救ったりすることを非難する道徳上の権利はありませんでした。

イスラエルでは祭司だけが神の近くに行くと考えられていました。例えば、神殿の至聖所に入って神に供物などを捧げることができるのは祭司だけで、これを破った人は追放されるか死刑にされました。このようなことから人々は祭司を恐れていました。しかしイエス様が矛盾を突いたことで、祭司に対する民の尊敬は大きく失われ、民は祭司の権威を疑うようになりました。

## 論争を呼ぶ教え

イエス様の説いた教えは議論的になるような内容でした。「神の国はあなたがたの間にあるのだ」（ルカによる福音書 17 章 21 節）とか「あなたたちは神々である」（ヨハネによる福音書 10 章 34 節）と言いました。これは、「神聖さはあなたの心の中にある、天国は外の世界ではなく自分の中に存在する、だから特別な所に行かなくても

自分の中を見ればそこにある」という意味です。

サマリア人の女性にイエス様はこう言いました。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」（ヨハネによる福音書 4 章 21 節～24 節）

人の真の本性が神性であるならば、神性はすでにあなたの中にある、だから祭司に間に入れてもらう必要はなく、神を礼拝するためにエルサレムの神殿に行く必要もない、ただ祈りを欠かさず純粹に生き、他者にできるだけ善を為せばよい…。このような主張をすることは、確立された権威を脅かすことになります。

次の2つの掟は、イエス様が旧約聖書から引用したものです。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しな

さい。」「隣人を自分のように愛しなさい。」（マルコによる福音書 12 章 30 節～31 節）この 2 つを実践するだけで救われるということですが、実際にはそれほど簡単ではありません。これを実践するには、当時一般に広まっていた偽善的な信仰心ではなく、大きな犠牲と放棄が必要だったからです。

## 奇跡は教えるための道具

イエス様はこのメッセージを伝えるために奇跡を行いました。イスラエルの民の病気を癒すことで、社会での居場所と尊厳を彼らに取り戻したのです。同時に、神の愛と慈悲は人の定めた決まりを超越しているのだと教え、真の清らかさは外側に関する決まりに従うことではなく、内なる純粋さを大切にされた生き方を送ることにあると教えました。

例えば、イエス様はこう言いました。「すべて口に入るものは、腹を通して外に出されることが分からないのか。しかし、口から出て来るものは、心から出て来るので、これこそ人を汚す。悪意、殺意、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、悪口などは、心から出て来るからである。これが人を汚す。」（マタイによる福音書 15 章 17 節～20 節）

また、姦淫の意味についてこう言いました。「しかし、私は言うておく。み

だらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。」（マタイによる福音書 5 章 28 節）そして、修道士への道が開かれていることを、自らを手本として示した人はイエス様が初めてでした。「結婚できないように生まれついた者、人から結婚できないようにされた者もいるが、天の国のために結婚しない者もいる。」（マタイによる福音書 19 章 12 節）イエス様が現れる前は、ユダヤ人の中のわずかな人たち、例えば預言者やその弟子たちだけが修道士として生きましたが、イエス様の後には多くの人が修道士の道を選ぶようになり、特に、キリスト教運動初期の数百年間において修道士となる人が数多く見られました。

## 生きた手本

言い換えると、イエス様は外側を縛る決まりから人を解放し、内なる清らかさや、慈悲、謙虚さ、隣人を自分のように愛することなどに重きを置いた新たな霊的制度を説いたのです。イエス様の教えはすべて、旧約聖書の中に既に書かれていました。だからイエス様は「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っはならない。廃止するためではなく、完成するためである。」（マタイによる福音書 5 章 17 節）と言ったのです。イエス様は、純粋で神聖なものすべてを体現してい



ました。また、人々に恐れないう説きました。当時の祭司や暴君の偽善を獅子の如く激しく批判しましたが、自分はそのために命を捧げなければならぬとよく分かっていました。つまり、真理に基づいた生涯を送る方が良い、偽りの奴隷となって生きるよりも真理のためにすべてを捧げる方が良いと示したのです。

人々が従うことを強いられた、人間の作った決まりである「人の道」と、イエス様が説いた「神の道」の違いが分かります。

## 受難

最後に、イエス様が十字架にかけられたことにどのような意味があるのでしょうか。このイエス様の受難は、単なる物語として見ることもできます。神の御子なのに、人類のために十字架にかけられて亡くなったかわいそうな人の話にすぎないと考えることもできます。しかし私が思うのは、イエス様の生涯は、神に到達するために信者が経験しなければならない内なるプロセスの象徴だということです。イエス様の受難は私たちも経験しなければならない受難であり、私たちの「天の父が完全であられるように」私たちも「完全な者と」（マタイによる福音書5章48節）なるために経験すべき「死」なのです。イエス様は言いました。「わた

しについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」（マタイによる福音書16章24節）自分の願望や肉欲、利己主義的な考え方を捨てることは大変で、苦しみを伴います。「良くないが楽しいこと」をやめることは、十字架にかけられるように苦しいことがあります。パウロが言ったように「キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。」（ガラテヤの信徒への手紙5章24節）私たちが「死ぬ」のは、私たちを有限な肉体に縛りつける罪から離れるためであり、霊的な自分、永遠の命がある霊へと新しく生まれ変わるためなのです。

イエス様がこの事を明言しているのは、ヨハネによる福音書に見られます。エルサレムの議員であったニコデモに向かってこう言います。「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」（3章3節）これに対しニコデモは言いました。「年をとった者が、どうして生まれることができますでしょうか。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」（3章4節）するとイエス様は肉体の再生のことではないと言い、「肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。」（3章6節）と答えました。言い換えると、イエス様が言っていたのは

内なる死と再生、心と霊のレベルで変わることでした。つまり、イエス様の真の弟子になりたいのであれば、この内なる霊的变化を経なければならない、そうでないと聖書に描かれている主の生涯と死は単なる美しい悲劇で終わってしまい、私たちの毎日の生活とはあまり関係のないものになってしまうのです。イエス様が身をもって示した生き方に倣おうとすることで、イエス様のメッセージが生きた教えとなるのです。

最後に、イエス様の教えと生涯には普遍的な力があり、時と場所を超えて人々の心に響くものだと言えるでしょう。当時の世界にあれほどの速さで広まり、そして今なお生き続けている理由はそこにあるのです。

## 忘れられない物語

### 第一義

京都の黄檗（おうばく）山萬福寺に行くと、総門に掛かっている大きな額に彫られた「第一義」の文字が目に入る。

書道の分かる人は皆、この巨大な文字を傑作だと褒め称える。これは約200年前に高泉が書いたものである。

はじめに文字を紙に書き、それを基に職人が木に文字を彫って完成したのが

この額だ。高泉がこの字を書いた時、弟子が一人そばについて大量の墨を用意した。この弟子は、大胆にも師に何度も書き直しを求めた。

「これは、よくありません。」高泉が1枚目を書き終わると弟子が言った。

「これならどうだ。」

「駄目です、先ほどのよりも悪い。」弟子は言った。

高泉は忍耐強く、1枚、また1枚と「第一義」を書き続け、ついに84枚となった。それでも弟子は首を縦に振らなかった。

ちょうどその時、弟子がふとその場を離れた。高泉は考えた。「よし、今なら奴が見ていない。」師は雑念のない無の境地でさっと文字を書き上げた。第一義。

「これは素晴らしい。」弟子が言った。

(出典：Seven Zen Stories)

## 今月の思想

日の光が壁を照らす  
美しさを得た壁も、その輝きは借りもの

単純なる者よ、なぜ土塊（つちくれ）  
に心を奪われるのか  
永遠の輝きの源を探し出すのだ  
（ジャラルール・ウッディーン・ルーミ  
ー）

発行：日本ヴェーダータ協会  
249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1  
Tel: 046-873-0428  
Fax: 046-873-0592  
Website: <http://www.vedanta.jp>  
Email: [info@vedanta.jp](mailto:info@vedanta.jp)